

同窓会だより

平成24年8月15日
新潟大学同窓会山形県支部事務局
発行 TEL0237-67-2600 井上

同窓会出席の記

小関朋子

この度、ひょんなことから新潟大学人文・法・経済学部同窓会に出席することになった。

5月にあつた支部役員会後の懇親の場で、参加費補助するから参加したら、となげない話から本当に新潟に行くことになった。その代わり、支部会報に何か書くようにとのこと。作文嫌いの身としては、シマッタと思つたが後の祭り。総会当日の7月7日、雨の中、見立さんの車に乗せてもらつて新潟へ。以下に、新潟

での2日間のことを記してみる。

(1) 同窓会総会のこと
受付の傍で、「総会提出議案」という5項目の議案が記載されたペーパーをもらう。これは、緊急動議が出され一波乱起きるなど思ったが、議事は質問もなく淡々と進む。議事終了後、「総会提出議案」が配布者によつて読み上げられるが、「意見として聞きおく」という議長の一言で、あつてなく総会は終了した。
出席者が60名と極めて少ないことから、会費を納めてはいるが会運営に関心のない会員が多数と思う。そういう中で、

同窓会活動に
関っているか
らこそ問題意
識を持った彼
は、中身の是非は別にして
貴重な会員だと思う。一寸オモシロさを感じた。
懇親会では、学生時代に心理検査などの指導いただいた先輩に会うことができ、有意義な時間となった。皆さんも一度出席されることをお勧めします。
(2) 下宿先の訪問のこと
人文学部正門前のお宅に3年間間借りをしていた。2階の部屋から校舎がよく見え、1時限目の授業の時など、先生が校舎に入るのを見てから登校して間に合う近さだった。家は建て替えられており、周りの街町並みもすっかり変わり、家を間違ひそうになる。

当時小学2年生だった長女がわざわざ来てくれていた。

「あつ、〇〇ちゃん」

と声にしたとたん、目の前の熟年女性がかわいい女の子とだぶった。ご夫妻もお元気で、学生時代に戻ったかのように思ひ出話を話すうちに、あつという間に時間が過ぎた。お昼を御馳走になり、おいとましようとしたら、長女の御主人も顔を見せてくれた。

お互い元気なことが確認でき、約半世紀前にタイムスリップしたかのようなひと時を楽しく過ごすことができたことをうれしく思った。

こういう機会をつくつていただいた支部同窓会の皆様にお礼を申し上げます。(昭和42年卒業 人文学部人文学科)

学生アパートの思い出

細矢正利

私が入学したのは昭和47年、今からちょうど40年前のことである。当時の五十嵐キャンパスは、教養部の建物ができたばかりで、人文学部や農学部はまだ工事中であり、松の木と畑に囲まれた文字通りの「五十嵐砂漠」と呼ばれる広大な場所、ポツンと大学が建っているという光景であった。

たまたま、私の2女が平成18年に新大(教育人間科学学部)に入学することになり、アパートを捜すために、大学周辺をいろいろと回つてみたが、私の学生時代とはまるで別世界の町並みになっていて、かつての「砂漠」のあまりの変わりように

驚いた。

娘のアパートは、8畳の部屋にロフト付、台所、洗面化粧台、風呂とトイレは別々。「何とまあ、ぜいたくな」と思ったが、学生と言えどもこれがあり前の時代になったのだろう。

ちなみに、私の当時のアパートは、4畳半一間、家賃は光熱費を含めて5千円くらいであり、トイレと台所は共同、電話もなく（後で公衆電話を設置してもらった）、風呂もなく、内野の町中にある銭湯へ通った。つくづく時代が変わったものだと実感した。

私がいたアパートの場所は五十嵐二の町で、小学校の近く、坂の途上にあり、確かこの辺にあったと思うながら捜してみたが、もう整然とした町並みに変わり、当時の建物は跡形もなく消えてい

た。

結局、私はこのアパートに、部屋を一回変えただけで4年間暮らした。この同じアパートに、福島出身のF先輩と新潟巻町出身のM先輩がいた。

2学年上の両先輩からは大変お世話になった。二人とも理学部の物理学科で同期生だった。同じアパートに入った同期の友と一緒にマージャンや囲碁などを教えてもらった。りしたが、私の方はどうもあまり上達しないので止まった。

F先輩は、卒業後東京にある理化学メーカーに就職したが、その年の夏、8月頃だと思うが、故郷の川に身を投げた。この突然の知らせを聞いて、M先輩を始め、急遽車でF先輩の実家（国見町だったと思う）へお参りに行くことになった。途中豪雨に遭いながらも

ようやくたどり着くことができた、何とも悲しい思いで、F先輩の遺影に手を合わせた。就職してわずか4カ月余り、F先輩に何があったのかはわからない。

M先輩は、大学院に進学し、その後の進路をどうするか迷っておられたようだったが、新大の医学部を受験し直して、医者への道を歩むことになった。ちょうど私が卒業する時に医学部に合格して、新たな6年間の学生生活を送ることになったが、その後、M先輩とはすっかりごぶさたになってしまった。今はもう立派な医者になっておられると思う。（昭和51年卒業 人文学部経済学科）

新潟大学の魅力とは

斎藤直樹

今まで多くの先輩方がお書きになった内容と重複するところがあるかも知れませんが、ご容赦ください。よく、出身大学の良いところはということをお訊かれましたが、新潟大学の魅力について訊かれれば、私は三つ答えることにしています。一つは、環境が良いこと。

私は法学部でしたので、五十嵐キャンパスに通っておりましたが、当時はすいかなどの砂丘畑の中に新しいキャンパスが、ゆったり広々と広がっておりました。その中で遊びのびと大学生活を送ることができたと思います。近隣に繁華街がなく、勉強するには恵まれた環境

です。また、五十嵐地区は総合キャンパスでしたので、各学部のいろんな学生が数千人集まっております、多くの交友関係を持つこともできたように思います。

二つ目は海が近いということ。海のある生活が懐かしく感じられます。新大名物「浜コン」（最近近は街コンなるものが流行っ

ているようですが、浜に行つてコンパをすること）、大学から海が近いのでよくやったものです。五十嵐浜や医学部の近くの寄居浜、六華寮の近く関屋金衛町浜などで、夕刻酒やビールを持参し、フアイヤールを焚きながら明け方まで仲間と語り明かしました。途中で中締めはありません。必ず朝まで翌朝下宿に戻るときは砂で全身ザリザリの状態でしたが、厭きせず何度も

やった記憶があります。これがきっかけでめたく付き合うことになったカップルも結構いたように思います。

三つ目は人間付き合い合いが密だったことです。

当時所属していた部活の顧問である教授からは

「せっかく大学に入ったのだから、勉強も良いが、本を読むのもよし、人間関係を深めるのもよし、いろんなことにチャレンジしなさい」というありがたいアドバイスをいただいていたので、その言葉どおり、本を読み、部活をし、友人と語らうことにほとんどの時間を費やしたものです。

当時五十嵐キャンパスの近く、五十嵐一の町、二の町に下宿が多く建っており、毎日、毎晩のように仲間と酒を酌み交わし、マージャンをし、部活をし、そしてまた酒を

飲む、腹が減れば「かねこ」や「ワープ」でカツ丼やカレーを食べるといった生活のパターンでした。年齢的にもいろんなことに興味を持つ年頃だったこともあり、いろんな経験をさせていただきました。

近年、人と付き合い合うことが苦手な若者が増えていると聞きますが、当時は普段の生活の中でプライベートの部分があまりなく、人付き合いを余儀なくされる環境にあったように思います。そのおかげで大学時代に得た多くの友人は今でも付き合い合っています。(昭和60年度卒業 法学部法学科)

入学当時の思い出

笹 浩行

運良く新潟大学に入学できたのが昭和61年の春。それまで修学旅行以外山形から出たことのなかった世間知らずが一人で受験に行くのだから家族も巻き込み大変な騒ぎとなった。ニュースで知る新潟はいつも大雪で、毎日雪下ろしをしている印象。3月初旬だが長靴にするかスノトレにするか親も交えて大いに悩み、かなりの重装備で出発した。(新潟駅に着いたら新潟美人がハイヒール。幸いに親の反対を押し切りスノトレにしたが、長靴だったら新潟に暮らすことはなかったかも)

陸羽西線を経由し羽越本線で(確か)特急なほに乗り新潟に向かう。

うとうとしていると何やら自分を呼ぶような車内放送の声。よく聞き取れず、なぜ呼び出されたのかと急に心細くなる。車掌を探そうと立ち上がる。と再び車内アナウンス。「新潟名物『笹(●)』だんご(●●●)』を車内で販売しております・・・」

宿泊は新潟グラントホテル。食べ慣れない洋食の朝食で、パンとスクランブルエッグに妙に感動し気分が高揚。出されたオレンジジュースがおいしくて、合格したら絶対飲みに来ようと心に誓う。入学後当ホテルでバイトしていた友人に「どこでも売っている缶ジュース」と聞いて以来自分の舌には全く自信がない。

合格後、アパートを探しに再び新潟へ。事前に配布された不動産情報を頼りにまず見学と思いバスから降りると、待ち構

えていたのは、かつて新潟美人だったと思われる女性の集団。そのうちの一人に捕まると、あとは典型的なパターンでその女性の所有する格安アパートに入居することとなった。

新潟での拠点は産業道路沿いの古俣伝次郎商店から道路向かいの道に入り渡辺荘の前を通過し、畑を通った砂地に立つ「渡宣荘」。6畳一間と幅90センチほどのキッチン、風呂・トイレはもちろん共同であった。新潟大学を知り尽くした、いかにも曲者の4年生が4〜5人住んでいたことを考えるとコストパフォーマンスは良いアパートだったのかもしれない。新潟生活のスタートはこうして始まった。

何事も新鮮で、希望に満ちていた。が、実際は徐々に浮かれ始めていた

日本経済と同様に遊びとアルバイトに明け暮れ、当初の思惑とはずいぶんかけ離れた学生生活を送ることとなった。振り返れば贅沢な時間の使い方をしたものだと思ってしまうが、あの時期だからできたことは数え切れない。

悔しいと思うのは新潟に4年もいて一度も佐渡に行かなかったこと。もう10年以上新潟に行ったことがないので、久しぶりに万代橋を渡り、佐渡へ行ってみようと思う。(平成2年卒業 法学部 法学科)

全国を目指した4年間

熊坂 太郎

新潟大学を卒業してから

ら早くも4年が過ぎました。私は今年4月から鶴岡に転勤となり、仕事に追われながらも、新たな発見と出会いで充実した日々を送っています。

さて、大学時代を振り返ってみると、やはり真っ先に思い浮かぶのは、最も多くの時間とエネルギーを費やした部活動です。私は中学時代から陸上競技の長距離種目を続けていて、大学でも陸上部に入部しました。当時の陸上部の駅伝チームの目標は全日本大学駅伝。毎年11月に名古屋へ伊勢間(通称・伊勢路)で開かれ、箱根駅伝にも出場している強豪大学なども出場する学生駅伝最高峰の舞台です。しかし、高校時代までは全国を目指すには遠く及ばない自分のレベル、さらには様々な誘惑もある大学時代。入部当初の私は、自分

のレベルに見合わない目標を受け入れられず、朝練習をさぼったり、けがを繰り返したりで、練習に本気で取り組むことができていませんでした。部活動も学業も生活も中途半端。

そんな中、同期の一人が涙ながらに全日本への思いを語ってくれたことで、私の中にも「この仲間たちと全日本に行きたい」という気持ちが芽生えたように思います。その後は、多いときで1か月に700キロの走り込みなどそれまでにないほどの練習を重ね、毎日の生活にも気を配るようになりしました。苦しい時もありましたが、仲間たちと刺激しあいながら本気で練習に励むことができ、飛躍的に記録を伸ばすことができました。

できませんでした。しかし、全国に挑戦し続けたことは、それまで受け身な行動が多かった自分自身に変化をもたらし、自分を大きく成長させてくれたと思います。

また、練習だけではなく、飲み会にも、大学祭にも、それに一発芸にも熱くなれた4年間は、私にとってかけがえのない時間となりました。そのような時間を過ごせたのは、大学の仲間たちや新潟の地で出会った方々のおかげであり、とても感謝しています。

卒業後は、なかなか新潟に行くことができませんでしたが、陸上部の同輩や後輩たちの活躍は気になります。去年は、駅伝チームの後輩たちが、2年ぶりに全日本大学駅伝に出場するという嬉しい知らせがあり、居ても立ってもいられずに名古

屋まで応援に行ってきました。全国の舞台を堂々と走りぬいた後輩の姿を見て、私も負けないように頑張らなければと刺激を受けてきました。

新潟大学人文・法・経済学部同窓会山形県支部に参加させていただくようになり、多くの卒業生が県内の役所や企業で活躍されていることを知りました。世代や企業を越えて大学時代の思い出や山形のことを語り合える先輩や後輩は、大変貴重な存在だと思います。

私はまだまだ未熟者ではありますがですが、新潟大学で培った体力や粘り強さを仕事にも生かし、皆さんと一緒に故郷・山形を盛り上げていきたいと思っています。(平成20年卒業 経済学部経済学科)